

1. スズメ

北大植物園は周りをビルに囲まれていて周辺の自然とは孤立していますが、園内にはたくさん
の木々や草花があります。植物があることで、餌や棲みかを求めて、または休憩をとるために虫
や鳥等の動物が集まります。植物を観察するために入園される方が多いと思いますが、植物があ
ることで出来る、動物を含めた生態系も見ていただきたいポイントです。そこで今回のシリーズ
では園内で観察できる鳥類を紹介します。

スズメという名前を聞くと、ほとんどの人がその姿を簡単に想像できるのではないでしょ
うか。姿かたちが愛らしく、日本中の街中でよく見かけるので、最も親しみやすい鳥かもしれませ
ん。そんな誰もが知っているスズメですが、分類学上はスズメ目のハタオリドリ科という仲間に
含まれています。ハタオリドリ科の仲間では、スズメ (*Passer montanus*)、ニューナイスズメ (*P.*
rutilans)、イエスズメ (*P. domesticus*) の3種が国内で確認されていますが、園内でスズメ以外の
2種が確認されたことはありません。スズメを見分けるポイントは、他2種の白い頬に対して、
スズメには頬に黒斑がある点ですが、幼鳥ではスズメも黒斑が薄いため注意が必要です。

スズメという名前はシュシュ（鳴き声）とメ（群れ）、またはササ（小さい）とメ（群れる鳥）
からきているとの説があります。アイヌの人々の間では、スズメはアマムチカブ（穀物を食べる
小鳥）と呼ばれ、この鳥だけが神様から穀物を食べることを許されているので、いつも大きな顔
をしてアワやヒエ、イナキビ等を食べているとの言い伝えがあるそうです。学名にある *montanus*
はラテン語で「山」を意味しています。最近では人の生活に密着しているスズメですが、学名を
考えた人は山の鳥というイメージを持ったのかもしれま
せん。

札幌では一年を通して民家周辺に住み、軒下や壁板の
隙間、道路標識のパイプや換気口等の人工物に好んで巣を
つくります。園内でも一年中見られ、春先から夏にかけて
軒下や壁の隙間等にたくさんの巣がつけられます。多いと
ときには同じ巣を使って、1シーズンに3回も子育てをする
ことがあります。幼鳥が巣立つと、園内のあちこちで頬の
白っぽい幼鳥が親鳥の後をついて飛ぶ様子が見られます。



スズメ (*Passer montanus*)

2. ハシブトガラス

植物園にはたくさんのカラスがいますが、皆さんは正確な名前をご存知でしょうか？園内で見られるカラスはスズメ目カラス科のカラス属という仲間に含まれています。国内ではコクマルガラス (*Corvus dauuricus*)、ハシブトガラス (*C. macrorhynchos*)、ハシボソガラス (*C. corone*)、ミヤマガラス (*C. frugilegus*)、ワタリガラス (*C. corax*) の5種のカラス属が確認されています。このうち園内で見られるのは、ハシブトガラスとハシボソガラスの2種です。ハシブトガラスは種小名の *macrorhynchos* (ギリシア語で *macro* = 大きな、*rhy-nhos* = 嘴^{くちばし}) が示すとおり、嘴が太く湾曲しているのです。嘴が細くて湾曲が緩やかなハシボソガラスと見分けがつかず、言葉だけではわかりにくいですが、博物館に並べて展示していますので、一度見比べていただくと違いが良く分かります。園内では一年を通して両種とも見られますが、特に繁殖期(春～夏)はハシブトガラスの数が多そうです。

繁殖期には樹上の10～20mの高さに枝や木の皮、時には針金ハンガー等を使って、器用に直径60cmほどのお椀型の巣を作ります。20年ほど前の記録では園内で繁殖していたハシブトガラスは2つがいほどでしたが、近年は毎年20個以上の巣が園内に作られ、そのうちの半分ほどが繁殖に使われています。一つの巣には2～4個の卵が産み落とされ、親鳥は卵が孵化^{ふか}するまでの16日～20日の間、雄と雌が交代で卵を温めます。雛が巣立って上手に飛べるようになるまでは、親鳥が巣や雛の周りを監視していて、危険が迫ると親鳥は体を張って卵や雛を守ります。このような時期に巣や巣から出た雛に近づくと、威嚇^{いかく}のために上から枝を落としてきたり、ひどいときには人を襲うこともあるので注意が必要です。

人を襲う時には背後から頭の近くを攻撃することが多いため、傘や杖等で頭の近くに障害物を作ることで攻撃を防ぐことができます。

幼鳥は巣から出てもしばらくの間、親鳥から餌をもらいます。幼鳥の頃は口の中が赤いのに対し、親鳥は口の中まで黒いので見分けがつかず、秋には巣から出た幼鳥が親鳥から餌をもらっている光景をよく目にします。



ハシブトガラス (*Corvus macrorhynchos*)

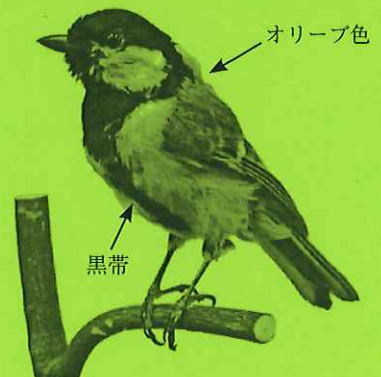
3. シジュウカラ

植物園には大きな木がたくさんあるので、木を棲みかにしたたり、餌をとるために虫が集まります。それを目当てにビルの多い街中ではあまり見かけないような鳥たちもたくさん集まります。シジュウカラ (*Parus major*) もそのような鳥のひとつで、木の無い街中ではあまり見られませんが、園内では一年中よく見られる鳥です。数も多いのでカラスやスズメの次くらいにポピュラーな鳥ではないでしょうか。

シジュウカラはスズメ目のシジュウカラ科という仲間に含まれていて、スズメよりも少し体の小さい鳥です。国内ではシジュウカラの他にハシブトガラ (*P. palustris*)、コガラ (*P. montanus*)、ヒガラ (*P. ater*)、ヤマガラ (*P. varius*) 等のシジュウカラ科の鳥が見られます。この中でヤマガラはお腹が茶色いのですぐに見分けがつかますが、他の4種は翼が灰色でお腹が白色の似たような色をしています。その中でもシジュウカラは肩のあたりがオリーブ色で、胸から腹にかけてネクタイのような黒い線がある等の特徴で他の仲間と見分けることができます。また、シジュウカラは種小名の *major* (ラテン語で「より大きい」の意) が示す通り、他の仲間よりも体が大きいので模様も見やすいように感じられます。

シジュウカラは日本中で見られる鳥で、落葉広葉樹林に多く生息していますが、木があれば住宅街等でも見られます。体が小さい割に力は強く、枝にぶらさがったり、幹に縦につかまったりと器用な一面もあります。よく木の皮の隙間を突いたり、木の枝や幹から頻りに地面におりて落ち葉をよけてせっせと昆虫や種子等の餌を探す姿を目にします。

5月から6月にかけて繁殖期をむかえ、主に樹洞等を巣として使いますが、巣箱等の人工物もよく利用します。園内では使われなくなった井戸のポンプで営巣したこともあります。人の目につきやすい場所でも平気で巣をつくりませんが、危険を感じると子育てを放棄することもありますので、巣を見つけた時は少し離れた位置から静かに見守ってください。繁殖期には親と雛の家族単位で群れをつくって子育てをします。初夏には親鳥が数羽の幼鳥を引き連れて木々の間を飛ぶ様子が見られます。子育てをしない秋から冬にかけては、他のシジュウカラ科の仲間やゴジュウカラ (*Sitta europaea*) のような同じくらいの大きさの鳥と混群を作ることがあります。



シジュウカラ (*Parus major*)

4. アカゲラ

植物園を歩いていると頭上からコンコンと木をたたく音が聞こえることがあります。多くの場合はコンコンと音がした後に、少し場所が変わってまたコンコンという音がします。これは鳥が木の皮を突いて虫等の餌を探している音です。木を突く鳥と言えばキツツキが有名ですが、園内にもキツツキの仲間がいて、その代表格がアカゲラ (*Dendrocopos major*) です。

アカゲラは北海道で一番よく目にするキツツキの仲間で、分類学上はキツツキ目のキツツキ科に含まれています。スズメよりもずっと大きく、頭から尾までの長さが20 cmを超えます。黒い背中と白い胸に赤い下腹部がよく目立ちます。幼鳥の頃は頭頂部全体が赤いのですが、成長すると雄は後頭部だけが赤く残るのに対し、雌では頭に赤い部分がなくなって全体が黒くなります。

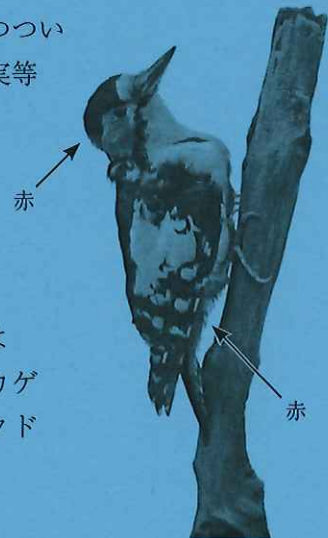
園内ではアカゲラのほかに、コゲラ (*D. kizuki*) やヤマゲラ (*Picus canus*) 等のキツツキの仲間を見かけることがあります。コゲラはスズメと同じくらいの大きさでお腹は白く、ヤマゲラはアカゲラより少し大きくて全身が緑色なので、アカゲラと見分けることができます。

アカゲラという名前は、下腹部と雄の後頭部の目立つ赤い色に、キツツキの古名「けらつつき」を略した「けら」、または鳴き声の「けら」がつけられた等の説があります。

学名の前半部分(属名)の *Dendrocopos* はギリシア語で「木」を表す *dendron* と、同じくギリシア語で「たたくこと」を表す *kopos* を合わせたもので、日本語のキツツキと似たような意味を持っています。

アカゲラは木の幹に縦にとまり、普段は木の皮やその隙間をつついて中にいる虫等を食べていますが、時にはチョウセンゴヨウの実等植物の種を食べることもあります。園内でも枯れたような木をよく見るとアカゲラの開けた穴を見つけることができます。

園内では1960年代から繁殖が確認され、その後も毎年1、2つがい繁殖しています。木の幹に直径5 cmほどの穴を開けて巣を作ります。雛が成長すると、巣の中から餌をねだる声が聞こえて、親鳥が頻繁に餌を運ぶ様子が観察できます。そのようなときは少し離れたところから静かに見守ってください。アカゲラが使った巣穴は他の鳥にも人気があり、翌年にスズメやコムクドリ等が巣穴として使うこともあります。



アカゲラ (*Dendrocopos major*) 雄

5. マガモ

植物園ができた明治期、植物園周辺はいたる所で湧水の見られる水の豊かな場所でした。園内には今も当時の川や池の名残があり、そこに地下水を汲み上げて池や湿地等の水辺の環境を維持しています。そうしてできた水辺は、休憩地や餌場として、カモやサギ等の水鳥に利用されています。

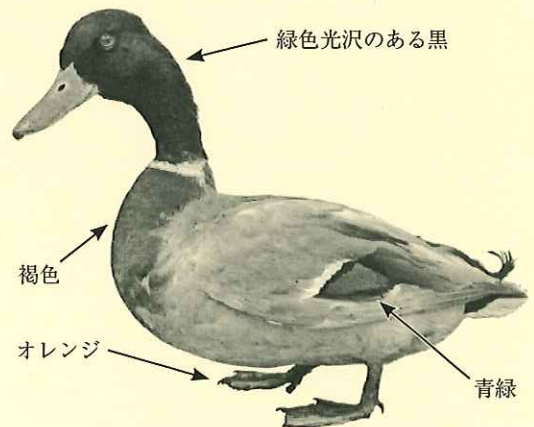
マガモ (*Anas platyrhynchos*) はカモ目カモ科の仲間に含まれていて、主に淡水域に生息する水鳥です。園内ではマガモの他にカルガモ (*A. poecilorhyncha*) やコガモ (*A. crecca*)、オシドリ (*Aix galericulata*) 等のカモが姿をみせることがあります。マガモの雌は全身が茶色に黒の斑が入る地味な色をしています。雄は頭部が緑色光沢のある黒で、胸は紫がかった褐色の派手な色をしています。種小名の *platyrhynchos* (ギリシア語で「広い嘴」の意) が示す通り、嘴は幅が広く平らな形をしています。嘴の色は雄が鮮やかな黄色なのに対して、雌では黒地にオレンジで縁どりされた、やや地味な色をしています。雄雌ともに足はオレンジ色をしていることや、翼を広げると後縁に青緑色の帯がある等の特徴で他のカモ科の鳥と見分けることができます。

マガモはシベリアやカムチャッカ半島等北半球の亜寒帯で繁殖して、越冬のため日本全国の湖沼や河川に飛来する冬鳥ですが、北海道では繁殖もしているので1年中観察することができます。

園内では1982年に初めて繁殖が観察され、近年では毎年3つがい程度が繁殖しています。雪が融ける頃には、ペアになった親鳥が巣に適した場所を探して、お腹を重そうにしながら芝生の上を歩いている光景を目にします。巣は水辺の茂みや、時には大きめの樹洞等につくられ、6月を過ぎる頃にはテニスボールくらいに成長した雛が巣から出てきます。巣立ってからの子育ては雌だけで行

い、母鳥の後について6~8羽の雛が池を泳ぐ姿が見られます。飛ぶことの出来ない雛は猫やカラス等に狙われやすいので、母鳥が常に周りに気を配っています。

この頃、子育てに参加しない雄鳥は、することがないのか5、6羽で群れをつくって池を泳いでいる姿が見られます。



マガモ (*Anas platyrhynchos*) ♂

6. ミヤマカケス

植物園では、秋になるとヤマブドウやドングリをはじめ、様々な植物が実をつけます。これらは冬を迎える野生動物にとって、厳しい冬を乗り切るための貴重な栄養源となります。山に雪が積もり、平地でも雪がちらつく頃になると、餌を探しにミヤマカケス (*Garrulus glandarius brandtii*) がやってきます。

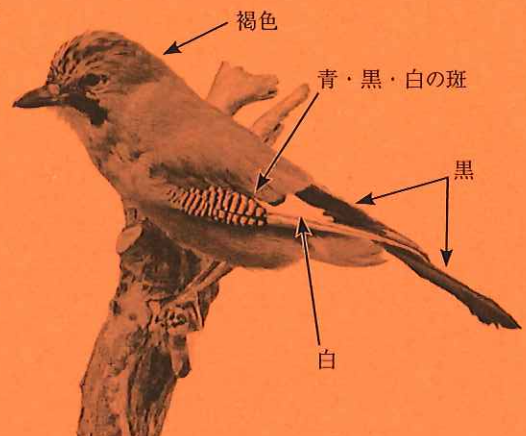
カケスはスズメ目カラス科の留鳥（渡りをしない鳥）です。カラス科の仲間に含まれていますが、体は紫がかった茶色で、翼と尾羽は黒く、喉、腰、下腹部は白くて翼の中間部に青・黒・白の混ざった模様がある等、他のカラス科の鳥よりも派手な色をしています。大きさはハトくらいのもので、尾羽が長くて目立ちます。

カケスは日本全土で見られますが、本州、九州、四国等に住むカケス (*G. glandarius japonicas*)、北海道に住むミヤマカケス、佐渡に住むサドカケス (*G. glandarius tokugawae*)、屋久島に住むヤクシマカケス (*G. glandarius orii*) の4つの亜種に分けられています。北海道で見られるミヤマカケスは頭が褐色なので、頭が白い他の仲間と見分けがつかず。

ミヤマカケスは北海道だけではなく韓国やシベリア、モンゴル等広い範囲に生息していますが、津軽海峡を渡って本州に広がることはできなかつたようです。この津軽海峡は鳥類や哺乳類にとって移動の大きな障害になってきたので、津軽海峡を境に棲んでいる動物が大きく変わります。このことを発見したトーマス・ブラキストンの名前から、津軽海峡はブラキストン・ラインと呼ばれています。

種小名の *glandarius* (ラテン語でドングリ) が示す通り、夏場は山地にいて虫等の小動物を食べていますが、秋から冬にかけてはドングリ等の植物の実を餌にしています。拾った木の実はその場で食べるだけでなく、時には木の窪みや土に埋めて、後から掘り出して食べる「貯食」という行動をとります。

英語で Jay と呼ばれるカケスの仲間は、その名の通り普段はジェーイ・ジェーイと大きな声で鳴きます。他のカラスの仲間のように様々な声を出すことができるので、時には他の鳥や動物の鳴き真似をして聞く人を困惑させています。



ミヤマカケス (*Garrulus glandarius brandtii*)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/>

参考：フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂版（日本野鳥の会 2008）ほか